

「命こ言葉は？」

「……く？」

「命こ言葉を聞こなさい」

「いや、あの、そんなもん、いるんですか」

「アドリブを効かせなさいよ、つまんないわねえ」

「急に言われてもね。それより早く入れてくれよ。寒こつたらなこば」

「命こ言葉ー」

「……開け」

「ださつ」

「いや、ださこも何も、なあ」

「もづきよつと気の利いた命い言葉、言えないの？」

「いや、愛の告白とかだつたらさ、オレも気の利いたこと聞こますよ。言わせせていただきま

すよ。でも命こ言葉にそんなものを求められても困るわけですよ。つか、どうでもいいから

早くチョーン外してくれる?」

「はこばー」

「寒かつたんだからな。この季節にバイク乗るのがどれだけ応えるか、わかんだろ?」

「今年一番の冷え込みだもんねえ」

「それを、やつとストーブにあたれると思つたら命こ言葉を求められるオレの気持ちにもなつてみてくださいよ。あー、あつたか」

「こらこらストーブを抱くなストーブを」

「じゃあ君を抱くー」

「寄るなオオカミ!」

「ひでえな。……なんだよ、君のとこだつて散らかってんじゃん。オレの部屋のひと、汚い汚

い言づくせん!」

「これは、しづがないの。今ちよつと忙しくて、片付けてる時間ないから」

「ちよつと?すこぶん長期間に渡つて堆積した乱雑さだと思つんですが?」

「うるさい。」

「うん」

「濃いめにする?」

「いや、薄めで」

「それじゃ濃いめにするね」

「……」

「レポートがたくさん出てるから、徹夜しなくちゃいけないんだもの」

「さいですか」

「別に今夜は遅くまで、とかいうんじゃないから誤解しないでね」「おのれ心を読みおったなー」

「まったく。凄い長めのレポートなの。うんざりだわ」「あのさ。じゃあ、今日はオレ、どうして呼ばれたの?」「ん?」

「いや、だつてレポートで忙しこんだり?」「いや、だつてレポートで忙しこんだり?」「そうよ」

「忙しいんだつたら、オレ、邪魔なんじやないの?」「手伝つてもらつに決まつてるでしょ」

「……」「瞿にかかつたオオカミ、つてどこ?」「んなこと、電話じや言つてなかつたじやんか」「そうだけ」

「そうだよ。淋しいから来てくれない?、とか言つてたじやんか」「そうだつたかしり」

「そうだよ。だからオレはこのクソ寒い中、急いでバイクで来たんだよ?」「大変だつたわね」

「……」「こりこり膝を抱えるな膝を」「いたいけな男心を利用しやがつて」「の字を書くな、の字を」

「ちきしょつ、金輪際、女なんて信じねえぞ」「そうぐれないのでよ。レポートが朝までに終わつたら、いいから。ね?」「ホント?」「はいはい、田キラキラさせなーい」

「どんなレポートなの?」「哲学の授業のレポートよ」

「オレ、哲学なんてわかんないよ」「大丈夫。知識は必要ないわ。要は、どれだけそれっぽく書けるかどうかよ」「……それっぽく?」「……それっぽく?」

「わかつたようなわからないようなことを書いて分量を稼げばいいのよ。最後に印象的な文で締め括れば、なんとなくそれっぽい読後感を味わえるわ」「……いや、そんなんで、いいの?」「いいのよ。どういう基準で採点するんだかわかりやしないんだから」「ま、哲学だもんねえ」

「ていうか、採点とかいうんじゃないの、これ。罰なの」

「罰?」

「遅刻が多い、って。罰としてこれやってこい、って罰のよ、教授が」

「それはまた『愁傷』というか」

「大学生にもなって、なんで遅刻で罰課題出されなきゃいけないのよ。信じられないわ」

「確かにねえ。そんな教授もいるんだ」

「たかだか五、六回連続で遅刻したくらこでさ。あのオヤジめ」

「いや、多いけど。寝坊?」

「まあね

「もつと早く起きろよなあ」

「私が悪いんじゃないわよ

「なんでき」

「目覚ましが鳴らないの。……なによ、その笑には」

「いや、小学生じゃないんだからさ。遅刻の言い訳に目覚ましが鳴らない、はないだろ」

「宇宙人にさらわれた、とかの方がいい?」

「それじゃ CW だよ」

「確かに言い訳かもしれないけどね。でも私としては、起きよつとする意思はあるわけよ。あの教授厳しいから、遅れないで出なくちゃ、と思つわけ」

「偉いねー」

「そ。その誠実さは認めてほしにものだわ」

「でもさ、目覚ましが壊れてるんだったら新しいの買ひ直せばいいだろ? 五回も六回も目覚ましが鳴らない、は、さすがにマズイだろ」

「壊れてるんじゃないの」

「は?」

「私も壊れてるんじゃないかと思つて試してみたんだけど、あちとと鳴るのよ。ただ、こぢヤツトして寝ると、朝鳴らないの。いつのまにか、セットした時間過ぎちゃってるの……いや、それって、無意識のうちに切つちやつてるんじゃないの?」

「無意識のうち?」

「そだよ。寝ぼけたままスイッチ切つちやつてるだけだらうが」

「違うわ」

「なんですか。だつて、壊れてはいけないわけだろ?」

「うん」

「じゃあ鳴つてるわけじゃないか」

「私が寝てる時は鳴らないの。起きてる時だけ鳴るのよ。どういう目覚ましだよ」

「知らないわよ」

「ま、もつと音の大きい田覚ましでも買うんだね」
「違うつたら。鳴つてないんだってば」

「へいへい」

「……」

「睨むなつて。別に君がねぼすけでも、オレは一向に構わないよ」
「違うつて言つてゐるのに」

「何が違うのを」

「鳴つてないんだってば」

「だーかーらー」

「本当なの。私、わかつたの。田覚まし、鳴つてないの」

「なんでわかるのさ。いいかい？鳴つたかどうかは簡単にわかるよ。起きててベルが鳴りや、鳴つたんだろうさ。でも、鳴つてない、つてことを言つるのは難しいぜ。鳴つたといふことが無けりや鳴つてないんだろうけど、それを言いたけりや、ずっと起きてて、鳴る、つてことが無かつたことを確認してなけりやならないんだ。鳴つたことの証明は一瞬だけど、鳴らなかつたことの証明は何時間もかかる。何かを『していな』ことの証明は、『した』ことの証明より、ずっと難しいんだぜ」

「どこで得た知識？」

「……カバチタレ」

「テレビドラマですか」
「テレビドラマですよ」

「まあいいけど」

「こういうの、悪魔の証明、つて言つんだってさ。君は寝てるんだから、田覚ましが鳴つてないことをずっと確認してゐるわけじゃないだろ？だから、鳴つてないだなんて言えないんだよ」
「鳴つた、つてことは言えるつていうの？」

「まあ、それも言えないけど、状況としてはそつ言わざるを得ないと思つね」
「違うの」

「まだ言いますか」

「本当に鳴つてないんだもの。どうして信じてくれないの？」

「いや、そういう言葉を恋人に言つ時は、もうちょっと深刻なシチュエーションで言つてほしいんだけども」

「なによ深刻なシチュエーションつて」

「ほら、君が浮氣していいるぞつていう密告メールがあつたりとか、無実なのに殺人者の汚名を着せられているとか、そんなとき。そんなときだつたら、オレも恋人の言つことだもの、信じてやるよ。警察が君を指名手配しても、かくまつてあげるし、一緒に真犯人を探し出してやる」
「……あなた、近頃、なんか変な映画か本でも読んだ？」

「だけどさ、ほら、田覚まし時計が鳴るの鳴らないのつてことで、信じて…とか言わわれても、

困るわよ。なんかいいか、すうとかググッ、でこないわけ

「ドラマとかのシーンで無いかしり

『曲のいと、信じる。曲の田覚まし時計は鳴ってなんかいやしなかったんだ。愛してる』の曲

で?」

「んで、ぎゅう、てあるの」

「新手の試みですな」

「きっと感動すると毎回『わ

「完璧にお笑いドラマだと思つさうむ。しかも一步間違えると意味不明で誰もつっこむれなくな、諸刃の剣」

「……」

「……」

「なんか話が反れた気がするんだけど」

「ちつ

「そうそう、鳴つてないの。田覚ましは

「わかつたわかつた。鳴つてないんだる。信じるよ。オレも、別れた理由はなんですか?田覚ましが鳴らないことを信じなかつたからです。なんてことになりたくねえもん。信じますよ」

「信じてないじゃない」

「信じてる信じてる」

「田を見て言つてよ

「信じてる信じてる」

「……本当に?」

「……本当に?」

「笑つなつ

「めんめん

「めんめん」

「……めよつと待つてて、田覚まし持つててくれるから

「いや、や、もういいじやんか。レポートやんなくていいのー?」

「はつきりしないことがあるのは嫌なの。ちよつと待つてて。あ、お湯沸いたから、コーヒー

淹れといでね」

「これが問題の田覚ましです」

「問題の、ね」

「きちんと鳴るのよ。聞く?」

「はあ……それにしても、田つき悪いね、これ」

「お田覚め、ギコくそ、てこつ。デパートで見つけて、可愛いから買つちやつた

「可愛いかなあ」「可愛いわよ」

「なんか、君の趣味ってや、こまごちよくわかんないんだよね。変とこうか奇妙とこうかなんてつたつて、あなたとつきあつてるんだものね」

「……」

「睨まないの」

「……」

「泣かないの。……踊つても駄目。あぴょーん禁止!」

「ちえ」

「人前でやつたら、別れるわよ」

「そんなに嫌?」

「聞くこと自体間違つてると悪いわ。……ともかく、目覚ましがきかんと鳴るのを確認してね。『起きた!』って言つて起じしてくれるの。……せり」

「憎たらしい声だなあ。……ん、一度寝防止機能つけてみじやんか。しつの後ろの方のスイッチを切らなこと、あた鳴るんだべ?」

「そうよ。『遅えた!』って言つてみじやんの」

「それでも、起きれないの?」

「だから、鳴つてないんだつてば。それに、止める時はメインスイッチ切つちやうから、しつの

機能意味ないのよね」

「なんでだよ。サブスイッチにしつけば、また起じしてくれるの?」

「だつて、うるさいじやない」

「……」

「……なによ?」

「いや、君、今、目覚まし時計の存在意義そのものを否定した氣があるんだけじや」

「氣のせこよ」

「そつかなあ」

「そうよ」

「ま、いいけど。……んでも、鳴るのはわかつたけど、朝には鳴らなこつてのは、じつやつたらわかるの?セツトして、朝まで待つ?」

「それもいいんだけど、起きてたら、鳴りそうな氣がするのよ」

「……どうこうことだよ」

「だから、起きてたら鳴るんだけど、寝てたら鳴らなうなのよね」

「いや、どうこう目覚ましだよ、それ。あのわあ、ここに加減諦めなせこつて。な~無意識に消しちゃつてるだけだつて」

「だつて」

「いいじやん。な~もづレポートやひづば。早くしなじよ、時間なくなつまつよ」

「お代わり、淹れてくるよ。砂糖、一杯でいい?」

「.....」

「.....」

「..... まあ、やっぱ難しいな。ていうか、何書いたらいいかわかんねえよ」

「..... 君はどひへ..... つて、君もほとんど進んでないじゃんか」

「うん」

「どうじょうな。哲学。哲学ねえ.....」

「..... 木があるとするわね?」

「へ?」

「木があるとするの」

「いや、突然、何?」

「哲学の、有名な話なんだけど」

「へえ。何か思いついたの?..」

「誰もいない、何もないところに、木が立つてゐるの」

「はあ」

「それで、その木には一つだけ林檎の実がなつてゐるのね」

「林檎」

「林檎」

「林檎」

「林檎」

「林檎」

「林檎」

「そのとき、音がするでしょ?」

「..... はあ」

「その音は、存在したと言えるかしら?」

「..... は?」

「そういう話があるの」

「へえ..... いや、存在してんだが、つて。わけわかんねえ話だね」

「存在してるとと思ひ?..」

「は？」

「本当に存在してゐるのかしら」「

「……いや、だつてさ、地面に落ちたわけだろ？林檎が。そしたら音が鳴るだろ。地面がよつ
ぱど柔らかかったら別だけどさ」「

「ええ。でも、それで音が存在すると言つていいのかしら」「

「何言つてんのさ、わけわからんねえなあ。だつて、音が鳴つたんだから音が存在すんだろ？空
氣の振動？そんなもんが発生するわけだからさ」「

「でも、誰もいないのよ」「

「……へ？」

「誰も、その音を聞いてないの」

「はあ」

「そしたらその音が存在すると、言つていいのかしら」「

「いや、ちょっと待つてよ、なんなのさ。聞いてなければ存在しないことでも言つづけ？」「

「違う？」「

「真実とか事実つて、なんだと思う？」「

「……は？」

「真実と事実」

「いや、急にそこまで飛躍されても困っちゃうんだけど」「

「このストーブがここにあるのは、真実よね？私達の神経が正常で、幻覚とかじやなければ」「

「はあ」

「私とあなたが話しているのも、真実よね。あなたが私の作り出した妄想じやなければ」「

「君の作り出した妄想だつたら、オレつて君の理想のタイプつてことのかな」「

「……それはいいとして。ともかく、とりあえず五感で感じたものは真実だと認める」とい
ましようか

「はあ」

「何かの存在を認知するくらい、まあ、真実といつていいくらい確度の高い情報つて、これだけだと思つうの。つまり、自分の五感で確認した情報ね。これなら、まあ自分が狂つてゐるんじ
やない限り、信じられるわね」「

「うーん……」

「他人から聞いた情報つてのは、もう少し確度が落ちるわ。たとえば、そつね、あなた、
浮氣してゐる？」「

「いきなりなんだよ。してないよ」「

「今どもりが怪しい」「

「してないつたら。あるわけないだろ？こんな綺麗な ちょっと時々ついてけなくなるナビ
彼女がいんのさ」

「今の情報も、私が浮氣をしていない、という眞実に比べたら確度が低いわ。ていうかもう、格段に」

「ひでえ。ホントしてないってば。ていうか、ずるいよ、君だつて浮氣してないとはわかんな
いじやんか」

「実はしてるの」

「……」

「冗談よ」

「……はじめっこめ」

「まあ、あなたの言う通りよ。私が浮氣をしてないかどうかは、あなたにはわからないわ。私
から聞いただけの、確度の低い情報だものね」

「……」

「よく推理小説とかでもあるじゃない。間違いなくこの中に犯人がいる、ってことになつて、
『一体誰なのよ！白状しなさいよ！私はやつてないんだから、あなた達のうちの誰かつてこと
よ！』とか言う人。その人が犯人じゃなければ、自分がやつてないという眞実を知つているの
ね。でも、他の人がそれを聞いて、なるほどそうだ、なんて納得していたら、犯人は誰もいな
くなつちやうわね。つまり自分が犯人でないという眞実は自分だけのもので、他の人には通用
しないの」

「……」

「でも自分が五感で得たこと以外を信用しなかつたりしたら、生きていけないわね。私はアメ
リカへ行つたことがないけど、アメリカって本当に実在するのかしら、とかいちいち考へてい
たら、多分今、ごろ発狂してるわ」

「……」

「だから、そこは他人の情報に頼るわけ。ただその情報は私にとつて絶対的なものではなくて、
ただ認めた方が都合がいいから事実としてるだけで、それに対する確証つてないわけよ。例え
ばね、旧石器捏造の人知つてる？自分で埋めて自分で掘り起こして大発見、とかやつてた人」

「ああ、例のゴッドハンド？自作自演の奴だろ？」

「そう。彼のした事が暴かれなかつたら、日本の歴史は違つた解釈をされて、それが事実とし
て認識されていたわけよね」

「……同じように、アメリカが実はドイツだつた、とでもいうの？」

「まあ、似たようなことよ。一人じゃなくて、たくさんの人人が証言してるから、可能性はず一
つと低くなつて、ほとんどゼロに近いけど」

「……」

「昔の人は天動説を事実として認識していたけど、それも今では覆つてるわね。結構、事実つ
て不安定なのよ。今常識として認められていることも、覆る可能性は必ず秘めているわ。地動
説だって、否定される日がくるかもしれないじゃない？」

「でも、天動説と違つて、観測されてるだろ。根拠があるんだからさ」

「そのへんは、あまり問題じやないと思うわ。ゴッドハンドの件だつて、物証という根拠が否定されたし。昔の天動説の根拠は、もつと根本的なものよ。教会の教え、ね。当時の人々にとって、それは絶対的な根拠だつたはずよ。それを、昔の人は馬鹿だつた、なんて笑つても、いつか私達が笑われる日がくるかもしれないわね。科学という根拠が崩れ去る日が、無いとは限らないわ」

「科学が崩れる?……待つてよ。そりや、科学で証明できないことはたくさんありますよ。つうか、今の科学ではね。未来はどうか、しんないよ。でも、既に証明されたことが崩れたりはしないだろ?」

「宗教も、信じる人にとっては同じことだわ。全世界レベルで洗脳されてしまえば、宗教の教えが科学よりも絶対なものになるでしょうね」

「でも、宗教は理論的じやない」

「理論は問題にならない。世界すべての人々が、地球は宇宙の中心だ、って言ってみなさいよ。いくら観測で結果を出して否定しても、ああ、面白いストーリーだね、って言われるだけだから。で、あなたは妄想狂つてことになるわね。地球は宇宙の中心であり続けるわ」

「……でも、事実は違うじやない」

「どうやって証明するの?科学といつ証明の道具そのものが否定されたら、証明できないわ。そしたら、それが事実かどうかといふこともわからなくなるわね。で、宗教という別の証明道具で証明したら、全然別の結果になつてしましました。それが事実です」

「うーん……」

「価値観の問題よ。一足す一が一だといふことと、神様はいる、つていうことの、どちらに絶対的な確信を持つてているか、つてこと」

「なんだか納得いかん」

「それは私達現代人が科学に絶対的な価値を置いていたかもしれないわね。事実も単なる時代の流れ。唯一無一の絶対、なんて存在しないと思うわ」

「でもなあ……」

「それに、あなたも前に言つてたじやない?誰か凄い数学者が、『数学の証明が正しい』といふことは証明できない』といふことを証明しちゃつたって」

「ああ……誰だつたつけ」

「忘れたけどね。だから、世界中の数学者は、いつ矛盾が生じるか怯えながら研究しなければならない、とか言つてたじやない?」

「いや、言つたけどさ……」

「つまり、根本的なところに、ただ信じるしかない、といつものがあるわけよ。絶対的なものじやないわ」

「……」

「数学の崩壊はそのまま科学の崩壊を意味するし、科学の崩壊は真実の崩壊を意味するわ。何

もかもが、引っ繰り返る可能性を秘めているの

「なんかやだなあ」

「何かの存在にしたって、他人から聞いた話だけでは、絶対的な確証は得られないわ。誰かが『おまえの彼女が浮氣してるのを見た』とか言つてきても、あなた信じないよね?」

「うーん……」

「考えるな」

「いや、ちょっと頭がこんがらがらがらり……」

「少なくとも、ちょっと疑うだけでしょ? 絶対そうだーつて決めてかからないわよね?」

「まあ」

「アメリカが存在しているかどうかってことも、本質的には同じことなの。ただ、その情報を真実と認識している人の数があまりに多いから、自分も真実と認めても良い、つていうだけだわ。準真実ね。自分が五感で得たものが真実で、他人から得たものが準真実。この二つは自分の中のもので、他人の真実と矛盾することもあるわ。で、真実の強さを測るために、事実つてものがあるの。事実つていうのは、そういう、真実の寄せ集めだと思うのね。いろんな人々の持つてる真実の中で、重なり合いの多い部分が事実、つていうか。つまり事実つて、真実の多数決に過ぎないのよ。事実も、そういう相対的なものなのよ。私が殺人の罪で指名手配されても、私が無実だということは私の中だけの真実であって、世界の人達がそれを真実だと認めなければ、私が人を殺したってことが事実にされてしまうわけよ。証拠が事実を示すというより、

証拠がいろんな人に真実を与えるの。それで、私がいくらやつてないって言つても、嘘か、あるいは精神分裂でも起こしてるか、つてことになるの。私の真実は、精神分裂という名のもとに排除されてしまうわけ。民主主義的ね」

「そうかなあ」

「それで、真実も事実もそういう相対的なものだつたら、誰も聞いていない林檎の音は、存在すらしていいない、ということにならないかしら。誰の真実にもなりえないんだから、それは事実にならないわ。つまり、音は存在しない、ということになるわけ」

「……なんか、さつき君が言つてたことがわかつた気がする」

「なに?」

「わかつたようなわからないようなことを言つて、最後をきちんと締めれば、それっぽい感じを味わえる、とか」

「でしょ?」

「まあ」

「それで、ここからが本題なんだけど
え、これが本題じゃなかつたの?」

「違うの」

「……なにさ?」

「目覚まし時計が鳴つたと仮定するどね、音が出ているはずよね?」

「な

「でも、私は寝ていたわけだから、その音を聞いてないの。誰もその音を聞いてないの」

۱۲۰

「そうすると、その音は存在しないわけ。音が存在しないってことは、そもそも田代までは鳴つてなかつた、つてことになるの。これは矛盾よね。だから、鳴つたと仮定したのは間違いだ

11

だから、田舎者ではなかつたの上

「おのせ」

「なに?」

「まあ、そうね」

「レポートの話とか、そういうんじゃなくて…」

「ああ、つて

「だって、あなたが信じてくれないんだもの」「一も、二からしい、眞理も事態もどういふ事いぢやねん

「負けず嫌いなのよ」

「とちがへ、これで油

「いや、納得しろって方が無理なよーな」

「 ていうが、自覚まし時計と眞実の概念を同列

「褒め詮葉と愛子取つてあくわ

しないかと

「たゞで」

「なに? するとあなたは、哲学なんて無意味で無駄で生ゴミ以下だとでも思ひつけ?」

「絶対的じやない？」

「学問はその垣根を取り払われて、互いに融合していくべきじゃないかしさ」

「いや、なんでもかんでも融合するのはマズイだろ。数学と文学を融合したりしたらヒラゴ」

「となるし」

「なんですよ」

「このベクトルの気持ちを述べよ、とか。作者の考えを数式で示せ、とか。なんかマズくない？」

「いいんじゃないの？」

「なんか、オレは君の度量の広さにまついてけなさそうだよ」

「ともかく、私は目覚ましが鳴つてなかつたことさえ承知してもらえれば、それでいいの。それに命かけてるの」

「なんか、微妙な人生送つてるんだね……」

「まあ。……で？ 異存はない？」

「異存つていうかさ」

「なに？」

「あのさ、木の話、あつたよな？」

「ええ」

「林檎が落ちたけど、誰も聞いてないから、その音は存在してない、ってことだつたっしょ？」

「そうね」

「木が聞いてるじやんか」

「……はい？」

「木が。木が音を聞いてるよ」

「だつて、木つて植物じやない」

「植物だつて音を聞くだろう？」

「植物に聴覚はないでしょ？」

「だつて、前に読んだことあるよ。なんか、二つの植物を用意してね、片方には音楽を聴かせておいて、もう片方はなんもしないで育てんの。勿論、他の条件は同じでね。そうすつと、音楽を聴いてる方が、成長が早いんだつてさ」

「それ、本当？」

「うん。だから植物を育てる時、声をかけながら育てるといい、とかよく言つじやない」

「……知らなかつたわ」

「で、その木が音を聞いてるんだつたら、林檎の音も存在して「いたつてことにならない」、まさか、人間限定とか言わないよな？ 人間しか真実を知り得ない、とか言わねえだろ？」

「それは、言わないけど……」

「じゃ、やっぱ音はあるんだよ。な？」

「……」

「お認めいただけましたか？」

「確かにその場合はそうかもしねないけど。でも、私の部屋には木も花も置いてないもの」

「なんも？」
「なにも」

「……」

「……」

「部屋を見せていただきましょつか」
「なにか邪なこと考へてるんじゃない？」

「そんなことないよ。確認するだけさ。よつと」

「あ、こひ。ちょっと待つてよ」

「開けていい？」

「……いいけど」

「それじゃ、開け」「ママー、つと」

「……ださ」

「……こりや見事に散らかっていませんか？」

「それほどでもないわよ」

「いやいや」「謙遜を」

「いつもはこんなでもないの」

「ほうほうそれはそれは、とんだ偶然で

「植物、無いでしょ？」

「んー。ちょっと探つてみないとわかりませんnaー」
「変態」

「あ、なんだよ、ひつでえなあ。家宅検索だよ家宅検索」
「無いつて言つてるでしょ」

「んー、つと」

「あんまりいじらないでよ」

「これ以上散らからないよ。痛で、やめひつて。……」「れは？」

「もう枯れてるわ」

「……これ、いつの？」

「記憶に無いわ」

「つたく。捨てるよな、だらしない」

「あなたに言われるなんて……」

「他には……特になさそうだな」

「それが最初で最後だつたんだもの。友達に貰つて育て始めたんだけど、すぐ枯らしちやつて。自信なくしたの」

「……パイプのベッド」「木製のテーブル。椅子はプラスチックで……本棚。これも木製」
「テーブルや本棚の木は、当然ながらもう死んでるから、音は聞けないわよ」
「ふむ……引出しの中は、見ていい?……なんだよ、睨むなよ」

「プライバシーの侵害」
「はいはい。でも、どうしようかな、役に立ちそつなのが見当たらない」「でしょ？」

「目覚ましが鳴った時に、虫でもいたらそいつが証拠になるんだろ？けど、わかんねえしなあ」「……虫も？」

「止まつてる虫の側で大きな音出したら、驚いて逃げ出すじゃん？音を聞いてるからじゃない？」

「……」

「さすがに微生物とかバクテリアとかミトコンドリアまで話凸げないから安心していこすよ。つうか、聴覚持つてるかどうか知んねえし」

「……なんだか、あなたも相当粘着ね」

「はははそんな、君ほどじゃないですって」「粘着」

「ねえ、目覚まさ、音漏れはしないわけ？」

「音漏れ？」

「目覚ましの音。部屋の外に漏れたりしてたらさ、聞く人は君以外にもいるわけじゃない。隣の部屋まで音が聞こえてた、とかさ」

「……」「いい、防音設備はいいもの」

「でも目覚ましの音だぜ？」

「聞いたでしょ？ そんなに大きい音じゃないわ」

「どうだねえ」

「……調べてみましょ」

「……く？」

「外に出て、調べてみましょ。せっかくしないのは嫌なの」

「なあ、なんかオレら、滅茶苦茶馬鹿みたいじゃないか？」

「そう？」

「そうだよ。あー、寒つ！」

「ええい離れろオオカミ」

「いいじやん、あつたかいだろ？」

「……ともかく、漏れなかつたでしょ？」

「ああ、まあな。このクソ寒い中、外で頑張った甲斐はあつた……わけだ」

「自信なさげね」

「そりゃあ」

「でも、隣の部屋の人、不審そうな顔してたね」
「そりゃそうだろ。いきなり訪ねてって、朝、田舎ましの音聞こえません? だもの。不審がるに決まつてんじやん」

「まあ、あまりお付き合い無いからいいけど」「いいんですか」

「とにかく、漏れてなかつたでしょ?」

「うーむ」

「これで納得してもらえた?」

「隣室には漏れてなかつた。窓から外へも漏れてなかつた」

「部屋の中だけだわ」

「寝室とリビング、ね」

「リビングにも植物は無いわよ」

「冷蔵庫、電子レンジ、炊飯器、ストーブ、テーブル、椅子……」

「音は聞けないわね」

「このバスケットは? 林檎に、蜜柑に」

「木から切り離したら死んじやつてるんじゃない? 養分も何も供給してないんだし」

「でも、熟れたりするのつて、生きてるつてことじゃない?」

「熟れるのは生体活動とは違うわ。死後硬直、つていうか、死後軟化?」

「他には?」
「冷蔵庫、開けていい?」
「頑張るわねー」
「負けず嫌いなんだよ」
「ま、いいけどね」
「んじゃ、お言葉に甘えて。お宅の冷蔵庫はいけーん」
「……何かある?」
「……タマ?」

「暖めても雛は孵らないわよ」
「牛肉細切れ」
「細切れに耳は無いわ」
「豚腿肉五百グラム。一百五十円」
「特売品に耳は無いわ」
「セロリ。白菜。人参。椎茸。レタス」
「お亡くなりになつております」

「蒟蒻ゼリー！アロエヨーグルト！ねるねるねるねー！」

ほほほほほ

くそお、何かないか何かないか

「誰がなれー」

何だなした何だ あ

フナリ 10月刊 1983年10月号

ああ、アカツ城の城主が死んでしまった。これが、アカツ城跡。

生きてる

……え？」

生きてるー動いてるー

馬鹿なー」「

「これいー買ひたやー」

「道間くらに廻るに物がんかに」

アサリで徳覚つてあるの?

それが問題でしょ？

「……調べてあるわ」

「わかんないね」

「うん」

「ネットも万能じゃないわね」

「もう、勝負は決つた。」

「アーティストの心」

「なー。まだないがあるの？」

「そもそも前提条件として、君を抜かしたこと」は正しいんだろうか

גָּדָרִים וְעִירִים

「だってさ、寝てたってさ、音は聞こえるんじやない？」

「……認識はできなーいわ」

は思えないけど

「さあ、木になつたことないからわかるないわね」

「まあね。小学生ん時、劇で木役になつたことだつたらあるけれども」

「……」

「クラス全員一致で、木役はオレに適任、つてなつた」

「……あなた、いじめられっこだつた?」

「……そうだつたのかな。いや、そんなことなかつたけど」

「まあ、意味不明なクラスだつた、といつひとで理解しておくれわ」

「ともかく、重要な点なんだけども、存在について、どうするの?。無意識の認識と、意識的な認識に分けてみようか? 前者は認めない? そうすると、随分この世界は欠落しちゃう気もするけどね」

「うーん……」

「犬なり鳥なり魚なり虫なり、どこからが意識的な認識をして、どこからが無意識的な認識なのか、わかんねえし。犬は意識的だと思うけど、虫は無意識的な感じがすんなん。音が聞こえたぞゴルア、とか考へてるとは、あんま思えねえもん」

「わかつたわよ。無意識も認めるわよ」

「そうすつと、寝てても音は無意識的に認識してるんだから、音は存在した。つまり、田覚ましは鳴つた、ってことだ、いかが?」

「無意識的に、認識してゐるのかしら」

「夢とかに出るじやん。周りでうるさい音がしてたりや、夢ん中でもその音が聞こえてたりや。無意識的に認識してるからしょ?」

「……そんな夢見てない」

「忘れてるだけだつて」

「……」

「観念しました?」

「……ねえ」

「……ん?」

「……忘れてる?」とつて、存在したのかしら?」

「……」

「……」

「……は?」

「……」

「朝だね」

「朝ね」

「朝日だね」

「朝日ね」

「コーヒー、これで何杯目?」

「もう数えてないわ」

「なんか、じてつもなく無意味な時間を過ごした気、しない?」

「ちょっと」

「レポート」

「レポート」

「白いね」

「白いね」

「まるで」

「生まれたての」

「赤ん坊の」

「よう」

「あははは」

「あははは」

「……」

「……」

「……」

「……錯乱してゐる場合じゃないわ」

「誰のせいでこうなつたと思つてゐるんだよ。聞こえなきや存在しないとか忘れてたら存在しないとか生物が存在しなかつた時の宇宙は存在しないとかそもそも現実は存在は存在の存在が存在するための存在とか」

「落ちついて」

「なんで目覚まし時計のために、ここまでやらなきゃいけないんだよ
まあ、とりあえずレポートのネタになりそつだからいいじゃない
「ネタにねー」

「ネタねー」

「とりあえずさ、もつ、レポート間に合わないよ」

「しょうがないわ。明日まで待つてもいいみたいにお願いしてみる
「オレ疲れたよー」

「私も疲れたわ」

「はづ……」

「眠い……」

「……ねー」

「……なーに?」

「君、存在してゐるー?」

「多分存在してゐると思つわー」

「……君が存在してること、確かめていいー?」

「そんな方法、あるのー?」

「あるわあ」

「じつやつて」

「……」

「……じつやつて」

「……オオカミ」

「……」

“……以上より、田覚まし時計が鳴らなかつたかどうかを確認するため、以下の事柄を調べることが必要である。

一、アサリ貝は聽覚を有するか否か。

二、筆者が見た夢に、音が知覚されていたか否か。（催眠術を用いることが考えられる）

三、
……”

哲学レポートより抜粋